

## 速読・要約指導の試み

——「T型式ノート取り」法を使って——

茜 八重子

### はじめに

Oxford (1990) は、言語学習のための直接ストラテジー (1) (direct strategies) に属する、認知ストラテジー (cognitive strategies) に基づいた学習方法の有効性について、次のように述べている。(2)

認知ストラテジーは多様性に富み、反復から表現の分析、要約に至るまで広範囲にわたっていて、外国語学習には欠くことのできないものである。この学習方法には、1) 「ノートを取る note taking」、2) 「強調をする highlighting」、3) 「要約する summarizing」の三つのストラテジーが含まれ、学習者が自分たちに与えられた目標言語の情報を整理したり、体系化したりするのに役立つ。「Note taking」には、主題や特定の問題点を体系的に取り込んでいく「T型式ノート取り (T-Formation Note Form, Source:Hamp-Lyons)」が有効である。これは学習のもっと初期の段階で始める方が効果がある。「Highlighting」は、色、下線、星印などを使って、節 (paragraph) の中にある重要な情報に注意を集中させることであり、「Summarizing」は「Highlighting」を考慮に入れながら、主題や結論を中心に、元の文章を凝縮し、短縮する。

そこで本稿では、中級前半の日本語学習者を対象に、(3) 上記の三つのストラテジーを考慮に入れた速読・要約指導を実践し、その結果について報告する。速読・

要約指導には、1999年度生はテキストの『日本語 2nd Step (以下 2nd Step)』を使い、1998年度生は『テーマ別 中級から学ぶ日本語 (以下テーマ別)』を使って、準備・理解・表現段階へ進んだ。準備段階では大まかな全体の構造や主題の把握、理解段階では全体の流れを体系化するために「T型式ノート取り (T-Formation Note Form: p.33 参照)」を使い、表現段階ではノートを基に要約をした。

最後に、フィードバックを念頭においた1パラグラフの要約作文へと指導した。それによって次のような学習効果が認められた。

- (1) 要点の把握とそのまとめ方がわかるようになる (1998、1999年度生)
- (2) 内容の順序に沿った「大意」の要約と主題や結論をもとに「要旨」の要約ができるようになる。特に『2nd Step』では、90分の学習時間内で当課の「新しい語句」、「ポイント1～8」、「本文の速読と要約」、「要約文と一文要約の作成」、最後に「質問に答えましょう」までのすべてが効率良く終了できる (1999年度生)。
- (3) 『テーマ別』の練習問題の「答えましょう」では、テキストを見ずに教師の質問に的確に答えられ、「話しましょう」では本文の要約と比較、または同意した「自身の意見」が言える (1998年度生)。
- (4) 要約作文を書くことによって、語彙、文法や構文がおさえられる (1998、1999年度生)。
- (5) 見出しを使った「一文要約」によって、さらに要点が絞れる (1999年度生)。

特に上記(1)、(2)に関連し、要約指導は時間がかかり大変だと思われるが、この方法を用いると時間も節約でき、学習者の要約に対する興味を持続させることができる、という結果が得られた。

また(3)に関しては、(課の難易度にもよるが) 90分の授業時間で当課の語彙、本文の速読、要点の強調 (highlighting)、「T型式ノート取り」、「要約」まで進むことができた。また読解のクラスで、漢字圏か非漢字圏かという点はかなり重大であることがわかった。今回のように、殆どが漢字圏からの学習者であり、抽象語彙である漢字に強いことから、予想以上に進むことができたとも思われる。(4)

## 1. 要約指導の有効性

要約は国語教育の分野では「論理的思考を高める」能力として、また、日本語教育の分野では、中・上級レベルの学習者の理解度を確認するための一つの有効な学習方法として、以下の5つの観点から重視されている（佐久間 1994 p.4）。

- 1)原文の質的な意味での縮小相似形である。
- 2)文章理解の多様性が示される。
- 3)言語情報の処理・伝達技術の一種である。
- 4)原文の文章構造が要約文の表現に反映する。
- 5)読み手の表現技法が要約文を形成する。

以上のように、日本では要約に対する認識はなされているが、その概念や指導方法、そして評価については未だ確立されておらず、欧米の語学教育とは大きな隔りがあることも指摘されている（佐久間1989、仙波1995、山田1996）。

## 2. 要約の定義

### 2.1 大意的要約

要約には一般的に「大意」と「要旨」の二種類がある（佐久間1994）。大意的要約とは、原文の表現をできるだけ用い、内容の順序を変えずにまとめる方法で、本文からの文をそのまま引用しながら各まとめ（段落）の要点を順に追っていく要約の方法である。従来の速読・読解の授業で行われているのが、この「内容の叙述」の大意的要約である。

### 2.2 要旨的要約

原文の内容を理解したうえで、主題や結論に焦点をあてながら全体を凝縮、短縮する方法である。大意的要約に比べ、一定の時間で全体の要点をまとめる作業は、本文の理解が不十分だと技術的に難しい。また、習う側も教える側も言語要素（語彙、文法、構文、漢字など）にとらわれすぎると、逆に混乱を招く場合があるので、指導上の注意が必要である（山田1996）。実際のクラス作業では、限られた時間内で大意的要約から要旨的要約へと発展させることは難しい。それは、

初級後半から中級前半レベルでは学習者の語彙数が限られているため、要旨的要約の意図とする「原文の表現形式にとらわれずに自分の言葉で要点をまとめる」ことが難しいことや、教師の指導上の問題などが挙げられる。

### 3. 要約作業の導入の意図<sup>(5)</sup>

別科日本語研修課程の中級前半学習者（以下、別科生）はテキストの終了後、中級への橋渡しとして『2nd Step』、そして『テーマ別』を使用しているが、筆者は日頃から、特に『テーマ別』使用に関連して、以下の3点で指導上のもどかしさを感じていた。

- 1) 本文が単に「大意」の羅列で終わることが多い。
- 2) 本文の内容が部分的にわかっているにもかかわらず全体の理解が不十分であることに起因し、次の「答えましょう」では足踏みの状態になる。
- 3) 理解が不十分のために、全体の主題や結論に焦点が絞れない。そのため、課の「まとめましょう」では不自然な文を作ることが多く、定着度が把握できない。

4点目はさらに現実的な問題になるが、別科に在籍している学生は一年間の日本語学習が修了すると学部や大学院へ進学する。そこでは日本人学生と同様に資料を読んでまとめたり、要旨を盛り込んだレポート作成が課される。これには、たんに「大意」の羅列ではなく、「速読・要約」作業が不可欠になってくる。そこで、学習者の「読み」の能力を伸ばしながら、書いて表現する能力を養う必要がある。

以上のような考えから、『テーマ別』に入る前の『2nd Step』使用の段階から「T型式ノート取り」使った要約指導を実践してみた。それによって、段落ごとに表された主要なトピックと、それに関する要点の列挙が整理され、正確に大意が把握でき、かつ要約まで進めるようになった。学生からは従来の読解指導のスタイルと異なり、「刺激があっておもしろい」という反応が返ってきている。

#### 4. 「T型式ノート取り」とは

大きく書いたアルファベットの「T」の横線の上に「テーマ」、縦線の左側に主題、あるいは段落ごとに表された主要なトピックを書く。そして、右側にそのトピックに関する要点を列挙していく。また、読みながら取り出したキーワードは左側に、それに関するキーセンテンスは右側にくる場合もある。読み物の内容が難しかったり、時間がかかると思われる場合は、左側のトピックが最初から記入してあるもの、あるいは右側の要点を穴埋めにするものを作成し、使ってもよい。要点の書き方として、中・上級レベルでは「体言止め」の文末表現を導入しているが（山田1996）、学習者のレベルによっては技術的に難しい場合もあるので「用言止め」でもよいと思う。

「T型式ノート取り」の要点をとめると図1になる。図2は買い物リストを使った具体例である（図2は Oxford p.87～88から引用）。

図1

タイトル・テーマ	
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 各段落の主要なトピック</li> <li>• キーワード</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• トピックに関する要点 (特別な例、コメントなど)を列挙</li> <li>• キーセンテンス</li> </ul>

図2

バナナケーキ	
必要な材料	レモンジュース ミルク 砂糖 バナナ 卵
必要な用具	大きいボール 計量カップ フォークとスプーン 油をぬったフライパン

## 5. 要約指導の実際の手順例

### 5.1 実施方法

以下に、「2nd Step」の第9課「すし」を使用例として、1999年度生に試みた実際の作業の進め方を取り上げる。なお、参考までに、教科書の該当部分をP.35に載せておく。

- (1)当課の「新しい語句」を導入。
- (2)「ポイント」で文法項目を押さえる。
- (3)本文の速読。

次の①～⑥の点に留意しながら、本文を速読する。

- ①キーワードは○で囲み、キーセンテンスの下にはアンダーラインをする。サブ・キーセンテンスがあれば、下に波線を書き入れる。
- ②キーワードは名詞であり、その名詞が修飾を伴う場合があること、多くなりすぎないことに注意する。また、本文の内容によっては、キーワードの数を前もって言うておく。
- ③キーセンテンスはキーワードを含んでいることもあり、主題に直結することが多いので注意する。
- ④談話の展開に注意する。(誰が何をどうしたか、なになにをしたのは誰か、どうしてそうなったのかなど。)
- ⑤わからない語彙や表現には( )を記し、あとで聞いて確かめる。
- ⑥文脈指示語や離れている主語と述語に注意する。

### 5.2 キーワードとキーセンテンスの把握

ここは、Oxfordのいう「強調する highlighting」に相当する。速読で目印をした、キーワードとキーセンテンスを取り出して発表してもらおう。特に、初級後半から中級前半の学習者は、キーセンテンスを単に本文から引用して、だらだらと述べる傾向があるので、きちんと指導する。また、要約はキーワードとキーセンテンスなしにはできないので、ここでしっかりおさえる必要がある。次に、とりだしたキーワードやキーセンテンスを入れながら「粗筋」を発表する。

### 5.3 段落分け

準備段階で得たキーワードとキーセンテンスを「T型式ノート取り」に連結するための段落分けに入る。まず改行ごとに分けてみる。または、文の流れに沿っておおまかに分けてみる。学生は段落ごとに切っている文はいいが、「切れ目」のない、会話文の場合は混乱することがあるため、注意を促す。ここでは、一つの可能性として3段落に分ける。

## 第9課 すし

日本の代表的な食べ物に刺身やすしがあります。これは日本へ来る外国人が一度は食べてみたいと思う料理の一つです。しかし、生の魚がきらいで、刺身やすしが食べられない人もいます。

握りずしは、すし酢をまぜて握ったご飯の上に、新鮮な魚や貝などの刺身をのせたもので、簡単に作れそうですが、一人前のすし職人になるには10年近くかかるそうです。

すしはもともとそれぞれの地方の産物を使って作ったもので、いろいろな種類があります。例えば、いなりずしは、豆腐から作った油揚げをあまく煮ておいて、その中に酢で味をつけたご飯をつめたものです。そのほかに、ご飯の中にいろいろな具をまぜた五目ずしや、キュウリやたまご焼きなどをしんにして海苔でご飯を巻いた巻きずしもあります。アボガドで作ったカリフォルニア巻きは、アメリカで生まれたものです。

家庭でも手作りの味をたのしんだり、来客があった時などには、すしの出前を頼んだりします。すしは冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうです。また、旅行に行ってもその地方のすしを味わうのも楽しいことです。最近では、デパートでも各地のいろいろなすしを買うことができるようになりました。こうしたことから、日本人はすしが好きなことがよくわかります。

## 第9課

### す し (学習者の実際例より)

第1段落：すしと刺身	－日本の代表的な食べ物。
第2段落：すしの種類	－いなりずし、5目ずし 巻きずし、カリフォルニア巻き
第3段落：日本人とすし	－冠婚葬祭に欠かせない。 －その地方のすしがある。 －日本人はすしが好きです。

#### 5.4 表現指導

「T字型ノート」の内容をもとに、ノートの左側に書かれた「段落」ごとのトピックと、右側に列挙した要点をつないで「大意」の要約をする。ここではノートの流れの順に、きちんとした「大意」の要約をするように指導する。次に「要旨」の要約では、原文の結論や主題を中心に、自分の言葉で短くまとめる。まとめる長さは本文の内容にもよるので、一定ではない。注意点として、佐久間(1997)は「原文の結論や主題を示す表現は、できるだけ原文と同じ形で要約文に残す」ことを指摘している。

#### 5.5 要約作文

最終作業として、5.4でまとめた要旨をもとに文を書く。これまでの準備段階でインプットした情報を、要旨に表現することによってアウトプットし、さらにまとめた要旨を文にして、フィードバックする。

要約の長さは原文を4分の1に縮めるのが一般的だといわれているが、この本文は比較的短いため、1パラグラフ(4～5行、150字程度で10%の増減)をメドに指導した。



## 5.6 評価基準

日本では未だ評価方法が確立されていないが、ここでは佐久間（1997）の評価方法とフランスの要約指導を参考にした、仙波（1995）から引用する。

- 1) 自分の主観を交えずに、本文の内容を伝える。
- 2) 原文の結論や主題を示す表現は、できるだけ原文と同じ形で要約文に残す。
- 3) 要約文は、文法、語句、表記、句読点等の誤りがないように表す。
- 4) 原文の最も重要な事柄を、できるだけ簡潔にまとめて要約文に残す。
- 5) 要約文は、制限文字数の範囲内で表す。
- 6) 書き言葉を用い、普通体で書く。

## 6. 要旨的要約と考察

### 6.1 要旨的要約

以下に、9課「すし」の要約例を(1)に、そしてタイトルを使った一文要約例を(2)に載せる。学習者の日本語学習歴は1999年5月上旬現在を示しており、8人中6人（韓国1、中国系シンガポール1、中国4）は3か月から8年の学習歴がある。この学習歴の差がどのように「要約文」に係わっているかについても考えてみたい。

なお、文中の下線部分は訂正が必要な箇所であり、（ ）内は筆者による添削例である。

学生1：日本語学習歴3カ月

- (1) 刺身やすしは日本の代表的な食べ物です。すしは（には）いろいろな種類があります。例えば、いなりずし、五目ずし、握りずし...そしてアメリカで生まれたものを使った（生まれたのが）カリフォルニア巻きです。すしは生の魚が（で）作った、おいしい食べ物です。すしも（は）冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうです。
- (2) すしは日本の代表的な、種類が多い食べ物です。

学生 2 : 日本語学習歴 1 年半

- (1)日本の代表的な食べ物は (に) すしや刺身があります。すしは、もともとそれぞれの地方の産物を使って作ったもので、いろいろな種類があります。冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそう (だ)から、日本人がすしが好きなことがよくわかります。
- (2)日本の代表的な食べ物に (の) 刺身やすしは、冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうです。

学生 3 : 日本語学習歴 1 年 4 か月

- (1)すしは日本の代表的な食べ物。すしの種類はいろいろが (×) あります。例えば、いなりずし、握りずし、五目ずし、巻きずし。すしは冠婚葬祭などの行事に欠かせないごちそうです。日本人がすしが大好きです。
- (2)すしは日本の伝統の (伝統的な) 食べ物で、冠婚葬祭などの行事に欠かせないごちそうです。

学生 4 : 日本語学習歴 2 年

- (1)日本の代表的な食べ物が刺身やすしである。すしはもともとそれぞれの地方の産物を使って作ったもので、いろいろな種類がある。例えば、にぎりずし、巻きずし、カリフォルニア巻きです (など)。  
日本人はすしが好きで、冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうだ。
- (2)すしは日本の代表的な食べ物の一つで、冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうです。

学生 5 : 日本語学習歴 3 年

- (1)日本の代表的な食べ物にいろいろな種類の刺身やすしがあります。その中で (に)、にぎりずし、いなりずし、巻きずし、カリフォルニアずしなどがあります。すしは冠婚葬祭などの行事にもごちそうしたり (かかせないごちそうであり)、(また)旅行に行ってその地方のすしを味わったりします。こうし

たことから、( ) 日本人がすしが好きなことがわかります。

- (2)日本の代表的な食べ物の中で、刺身やすしは冠婚葬祭などの行事や旅行に行くや(下線部分は削除必要)(に)いつもにかかせない食べ物で、日本人が大好きです。

学生6：日本語学習歴8年

- (1)日本の代表的な食べ物に刺身やすしがあります。すしの(には)種類がいろいろあります。例えば、いなりずし、五目ずし、巻きずしカリフォルニア巻きなどです。すしは冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうです。最近では、デパートでも各地のいろいろなすしを買うことができるようになりました。
- (2)すしは日本の代表的な冠婚葬祭などの食べ物の一つで、日本人が大好きです。

## 6.2 考察

ここでは、学習者6人の要約文に表れた問題点を5.6の「評価基準」の1)、3)、6)に関連させて考察する。なお、2)、4)、5) に関する問題は特にないため、ここでは省略する。

### 1) 自分の主観を交えずに、本文の内容を伝える。

学生1は、原文にない「すしはおいしい食べ物です」という、自分の主観の入った表現を使っている。しかし、「すしはおいしいから、日本人はすしが好きです」とも言えるので、学生1の表現は、要約文に必要とされる「言い替え(paraphrase)」として捉えることができると思う。

### 3) 要約文は、文法、語句、表記、句読点等の誤りがないように表す。

①助詞の間違いが学生1、2、4に見られる。特に学生2に、初歩的なミス(名詞に接続する「から」の使用/名詞の名詞)が見られる。授業でも同じような間違いをしており、興味深い。

また学生4は、「いろいろ(形動)」に助詞の「が」をつけ、「いろいろが

あります」となっている。両者に共通して、「品詞」区分ができていないことがわかる。

②文法・表記に関連して、学生5の「一文要約」に、接続表現（～や～や）の不要な使い方が見られる。また、「読解」の時点で問題があるように思われ、「すしは冠婚葬祭などの行事にかかせないごちそうです」を「冠婚葬祭などの行事にもごちそうしたり」と書いている。これは、評価基準2)にも関連してくる。

本国の大学では日本語専攻であり、しかも日本語学習歴3年であっても、速読・読解授業に慣れていないのかもしれない。

#### 6) 書き言葉を用い、普通体で書く。

筆者の指示不足のために、「です・ます」体又は、その混用がほとんどであったが、能力的には、「普通体」で書ける学習者たちである。

## 7. まとめ

要約の定義(2)に沿って、原文の言葉を使った「大意的要約」を試みてから、主題や結論に焦点を当てながら全体を凝縮、短縮する「要旨的要約」へと指導した。その結果、90分の時間内で殆どの学生が「要旨」の要約文に成功している。しかし数人は、「大意」と「要旨」の間と思われる作文となっているのが興味深い。

この点について山田(1996, p.153)は、「要約の種類には、大意と要旨以外に実際はその中間的なものが存在するのではないかと触れ、そして「主題、結論を中心にそれらを支える要点があり、原文と同じ順序で、原文の表現や言い替えが混じったものである」と述べている。筆者の考えでは、中間的な表現の方が自然な感じに思え、「大意」と「要旨」は、はっきりと二分化できないのではないだろうか、と感じている。これについては今後の研究が待たれる。

「一文要約」では、結論を中心に自分の表現に置き換えた、完全な「要旨的要約」になっているのが興味深く、要約の有効性が反映されていると思う。また、今回の試みでは、学習時間数(3か月～8年)に関係なく要点をとらえた表現になっており、筆者の指導法が授業に反映されたと思っている。

反省点として、考察 6) で述べたように、「普通体」での指導が欠落していることが唯一挙げられる。

付記: 本稿は「要約指導への提案—初級後半学習者を対象に—」(1999)に加筆、訂正を加えたものである。

## 注

- (1)目標言語に直接かかわる言語学習ストラテジーを直接ストラテジーと呼び、三つのグループ(記憶、認知、補償)に分けられる(p.37~51)。
- (2)Oxford (1990) p.43~45、p.86~93参照
- (3)大東文化大学別科、日本語研修課程に在籍する中級前半の学習者を対象に、1999年度の8名(中国7、中国系シンガポール1)は『日本語 2nd Step』を使い、1998年度の4名(中国3、内蒙古1)は『コース別 中級から学ぶ日本語』を使って、要約指導を行った。
- (4)筆者は他大学で、非漢字圏からの日本語学習者を対象に「要約指導」を行ったが、当課の漢字の導入や既習の漢字の再導入に時間がかかり、「大意」の要約の中途止まりとなった経験がある。
- (5)1998年度生はテキストの『新日本語の基礎 1、2』終了後に、1999年度生は『みんなの日本語 1、2』終了後に、中級への橋渡しとして『日本語 2nd Step』を使っている。わかり易い内容なので、初級後半から中級前半の学習者の「要約指導」に適したテキストである。それから『テーマ別 中級から学ぶ日本』に入る。

## 引用・参考文献

- Oxford, Rebecca L. (1990) "Language Learning Strategies:What Every Teacher Should Know" Newbury House:New York. (宍戸通庸・伴紀子訳『言語学習ストラテジー』凡人社 1994)
- 川口義一(1991)「中級クラスの速読指導」『講座日本語教育』第26分冊  
早稲田大学日本語研究教育センター

- 佐久間まゆみ編 (1989) 『文章構造と要約文の諸相』 くろしお出版
- 佐久間まゆみ編 (1994) 『要約文の表現類型－日本語と国語教育のために』 ひつじ書房
- 佐久間まゆみ編 (1997) 『要約文の表現類型と評価方法』 文部省科学研究費研究成果報告書
- 仙波純子 (1995) 「テキストの要約法について」 『講座日本語教育』  
第30分冊 早稲田大学日本語研究教育センター
- 山田しげみ (1996) 「日本語能力を伸ばすための要約指導」 『日本語教育』 89号

#### 資料

- 『日本語 2nd ステップ』 創価大学
- 『テーマ別 中級からまなぶ日本語』 YMCA語学教育研究所